

安本美典氏 講演録

王趁意氏提示の三角縁神獣鏡の検証

安本美典氏 講演 要約

文責 平松健

演題 洛陽で親発見(?)の三角縁神獣鏡について

日時 2016年1月24日

場所 文化シヤッターBXビル

本講演は先の西川寿勝氏との対談(討論会)という形式で行われた。本会場における西川氏の講演は基本的には本h pに掲載した内容と同一であるため、ここでは安本美典氏の講演・論証部分のみを掲載した。また安本氏の講演の中では論争の過程で順序が相違し、あるいは重複する場面もあるので、文責者の判断で適宜編集しなおした。文責者の理解相違、編集相違等は文責者の未熟としてお許し願いたい。

第一 考古学と偽造について

① 頻発する考古学上の偽造・捏造事件

1 二〇〇〇年に「旧石器捏造事件」という日本の、そして世界の考古学界を震撼させる事件が明るみに出た。これは複数の遺跡において、外から持ち込まれた石器が、ある人物によってその遺跡で「発見」された結果、それらの遺跡が事実と反して旧石器時代にさかのぼる遺跡であると認定されてしまった一連の事件を指す。

その人物はどこかで古い石器を入手し、それをあたかもその遺跡の発掘現場で発見したかのようにふるまう、あるいは誰かに発見させるべく前もって埋めるなどしてこうした【捏造】を行ったとされる。

事件がマスコミによって明るみに出るまで捏造を指摘できなかった日本考古学界の未熟さは遺憾であるが、ここではこの問題は措こう。一体なぜこの人物は捏造を行ったのか、その動機は何だったのだろうか。当人の言では、発見しなければいけないかのようなプレッシャーがあった、ということである。

2 実はこうした捏造事件は、パレスチナの歴史を学ぶ人間にも無関係ではない。二〇〇三年に、「イエホアシュ碑文」と呼ばれるヘブライ語の碑文が世界中のメディアを騒がせた。「イエホアシュ」とは、紀元前の九世紀後半から八世紀初頭にかけてエルサレムで王位にあったとされる、南ユダ王国の王である。

このイエホアシュがエルサレムの神殿を修復したことを記した碑文が骨董市場に出回っていたのである。イエホアシュが神殿を修復したことは列王記下12章5-17節に描かれている。つまり、もしこの碑文が本物なら、聖書の記述を歴史的に裏づける重要な発見であった。同時に、イスラエルやユダの王が記した碑文がはじめて見つかったことにもなったはずであった。碑文は上部がわずかに欠けているものの、文字の大部分が残っていた。一九九三年にテル・ダン碑文が発見されたことよりもセンセーショナルな出来事である。(長谷川修一『聖書考古学』)

イスラエルの考古局は直ちにこの碑文の真贋判定のためのチームを組織した。当初碑文の科学的な調査を行ったチームは、これかきわめて古い碑文であると指摘したが、その後別のチームの調査では同碑文が贋作であると結論された。碑文の書体、文法などの観点からもこの碑文が現代につくられたものであるという意見が出ている。

3 金石学の専門の鈴木勉氏の『「漢委奴国王」金印・誕生時空論』(雄山閣、2010年刊)に次の

ような文章がある（p 70）。

「今ひとつ卑近な事例を報告しておきたい。筆者の友人が数年前に北京の骨董市で二面の人物車馬画像鏡を買った。最初は日本円で5万円ぐらいに言われた鏡であったが、2度も3度もその店に出たり入ったりした彼の粘り強い交渉の結果、その現代鏡は約8000円で購入することができた。同行した筆者も、それまでに幾面もの出土画像鏡を見ていたので、その人物画像鏡の出来のすばらしさ（出土画像鏡によく似ていること）がよく判った。帰国後、筆者は、その鏡を友人から預かり、当代の著名な古鏡の研究者が集まる研究会に持ち込んだ。

失礼がないように言うておくのだが、研究者達の鑑識の力量を試そうとしたのではない。私は本当に彼らの研究者としての力を信頼している。ただ現代中国の鏡造り工人の技術水準を確かめたかったのである。いつの時代も偽物作りは、その工人と識者の鑑識眼との凌ぎ合いであるからだ。

高名な研究者達にこの鏡を見てもらったが、誰一人と現代鏡だと指摘することはなかった。現代の研究者は戦前の著名な研究者以上に数多く古文化財を観察調査している。これは間違いないことだ。さらに、彼らは確かな基準資料である出土資料を数多く見ている。であるから、現代の一流の研究者達が戦前の研究者に鑑識眼で劣ることはまずない。それほど、現代の研究者は良いものを沢山見ており、研究環境は戦前とは比べものにならない。

しかし、近現代の偽物作りの技術水準は、それを凌ぐ、と認めざるを得ない。筆者は、いかに高い鑑識眼をもつ権威者と言えども、肉眼では偽物作りに立ち向かうことは出来ないのではないかと、考えている」。

つまり、八千円以下の費用で、専門家が見ても本ものと区別がつかないような、すばらしい偽造鏡をつくることができるということです。

② 中国での偽物作りの特殊性

1 陶器専門家の三杉隆敏著『真偽ものがたり』（ほんものとしにせもの 見極めの奥義）岩波新書1996）によれば、

「中国では焼き物の偽物が国家の後押しで生産され、大航海時代以後、東インド会社や欧州の各王家を顧客としてスケールの大きな取引がなされた」（p 33）。

2 同氏はまた「中国人のコピーについての考え方」の項目で次のようにのべている。

「近頃写経がかなり広く行なわれているが、その手本として「摩訶般若波羅蜜多心経」（二六二字）があり、王羲之の書とされている。だが、四世紀初めには、このお経はまだ存在していない。これは唐朝の六四五年に玄奘三蔵がインドから持ち帰ったお経を漢文にしたものであり、それを名筆家王羲之のスタイルの字で記したものであるが、誰もこれを偽物とは言わない。もちろん、そこに至るまでの修練は厳しいものであったはずで、よこしまな、偽物を作ろうというような心で達することはできないほどの質の高さである。」

「かつて上海の博物館の最上階（新しい博物館が一九九四年にできたが、旧館においてのこと）は仿製品の作業場であった。もちろん博物館が作りミュージアムショップで売るものであるからと、唐三彩なども西安や洛陽の土を吟味して運ばせ、釉薬も唐時代とできるだけ同じものを分析して使用するようになっていた。したがって売値もかなり高かったが、幾十年も後に果たして私など別できるだろうかと心配であった。」

「絵画の収集のところで記したが、中国人のおおらかさというか、そのあたり日本人のように真贋には厳しくないことだけは確かである。いつの何であるとは言わないが、約十年ばかり前、中国から日本に運ばれて来た特別展の中の青銅器にも仿製品が三つのうち一つ混ざっていた。つい日本的な感覚でそのことを指摘すると、あちらのスタッフは「全部持って来ると本館の方が空になるので一点だけは残して来ましたよ」と返答していた」。

（特別展の展示物でさえ三つのうちの一つはいけない＝布目順郎さん）

「青銅器なども厠につっこんでおいたり、何かをまぜた錆のつきやすい土の中に埋めて何年かおいておくとか、海の中に新品の土器、青磁や染付を入れておき買いの付くのを待つとか、いろいろのやり方があるのだという話はよく耳にすることである」

「なお、一九九〇年のこと、大英博物館の正面から入った左手の二階で“F A K E”という特別陳列展があり、たくさんの偽物が陳列された。」

「今まで各博物館で本物の名品として陳列していたが偽物でした、と公示した品々である。欧米のコレクションナンバーの最後二桁は購入年度である。何年に本物として購入したが、調査の結果、何年に偽物であると判断した。そのためにはX線や赤外線写真も撮った。もちろん、分析も行なった、とその贋物発見の詳細がちゃんと記されている。」

③ 偽造と判断するに際して

1 課題と問題点

昨今少なからぬ良心的な研究者たちは、骨董市場に出回ったものを購入したり、研究対象にしたりすることを控えている。盗掘の助長に繋がるのを恐れる、ということもあるがもう一つの理由として骨董品の真偽判定の難しさという問題もある。

目で見て偽物と分かる鏡では商品にならない

客観的な検証データを呈示しなければ証明にならない。

なぜ正式の発掘によって出土した銅鏡についての情報を最優先しないのか。銅のなかに含まれる鉛同位体比の測定を行うなど、最低限の科学的手続きをへた上で、新聞記事をまとめないのか。

中国には「造旧〈ツァオチュウ zao jiu にせの古物の製造〉」という言葉がある。「造旧」がかなり専門的な職業になっている。

たんに専門家が見て、目で見て「本物」と鑑定しました、と言うのではなく、何らかの「分析」が必要なのである。少なくとも、他の人にも伝わりうる、真贋の根拠の提示が必要である。

新発見とされる「三角縁神獣鏡」は現代中国人の手になる贋造鏡であると私（安本）は判断する。そのように判断する理由を以下に述べる。

2 真偽判定の基礎となる出土物の認識

ア 真偽の目安

鏡の真偽は基本的にはその鏡が古墳・遺跡等から出土したもののか否かによって決定される。

盗掘によるものも含まれるが、極めて限定的に考えるべきである。神社仏閣等の伝承鏡は伝承の事実の検証が必要である。

骨董商等の扱う品々は基本的には否定的に考えるべきである。

イ 完全に真正とみなされる出土品の分類

「日本における銅鏡の出土数」は『国立歴史民俗博物館研究報告研究報告第56集〔日本出土鏡データ集成〕』に載っているものだけで4774面。

このほかに田尻義典著『弥生時代の青銅器生産体制』（九州大学出版会2012年刊）に載っている「小型仿製鏡集成表」292面がある。上記4774面とだぶる面があると思われるが当面検証していない。

また中国鏡については出土年と出土地の明示されているものだけを数えて計上した。中国南北を次図のようにすると（王仲殊氏分類）

北中国出土のもの	1588面
南中国出土のもの	1310面
中国全土	2898面

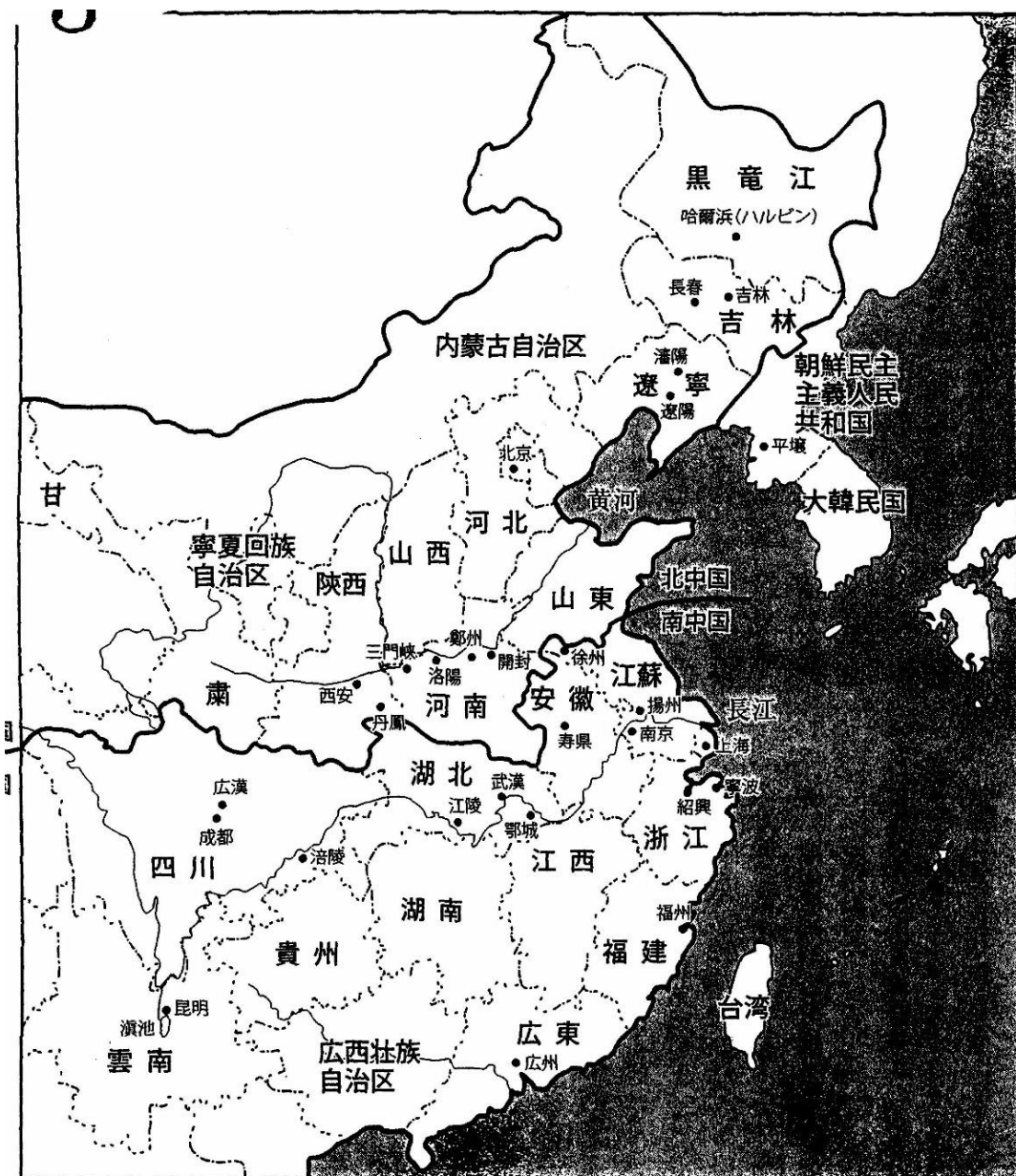
表1 中国における銅鏡の出土数

番号	文献名	出版社	発行年	カバーする地域	出土数 面
1	『歴代銅鏡文飾』	中国・河北美術出版社	1996	河北省	167
2	『洛陽出土銅鏡』	中国・文物出版社	1988	河南省洛陽市	214
3	『南陽出土銅鏡』	中国・文物出版社	2010	河南省南陽市	500
4	『長安漢鏡』	中国・陝西人民出版社	2002	陝西省西安市	336
5	『千秋金鑑—陝西歴史博物館蔵銅鏡集成』	中国・陝西出版集團・秦出版社	2012	陝西省のうち西安市をのぞく	77
6	『浙江出土銅鏡』	中国・文物出版社	2006	浙江省	262
7	『鄂州銅鏡』	中国・鄂州市博物館	2002	湖北省鄂州市	268
8	『常德出土銅鏡』	中国・岳麓書社	2010	湖南省常德市	188
9	『楚風漢韻・長沙市博物館蔵鏡』	中国・文物出版社	2010	湖南省長沙市	82
10	『銅鏡図案—湖南出土歴代銅鏡』	中国・湖南美術出版社	1987	湖南省のうち、常德市と長沙市をのぞく	8
11	『六安出土銅鏡』	中国・文物出版社	2008	安徽省六安市	253
12	『淮安市博物館蔵鏡』	中国・文物出版社	2011	安徽省淮南市	32
13	『広西銅鏡』	広西壮族自治区博物館編、中国・文物出版社	2004	広西省	160
14	『四川出土銅鏡』	中国・文物出版社	1960	四川省	39
15	『吉林出土銅鏡』	中国・文物出版社	1990	吉林省	142
16	『固原銅鏡』	中国寧夏人民出版社	2008	寧夏回族自治区固原市	123
17	『中国青銅器全集 16 銅鏡』	中国・河北美術出版社	1996	上記のものと重ならない地域のことをひろう。河南省6、陝西省8、湖北省2、湖南省1、山東省2、山西省4、黒竜江省1、遼寧省5、江蘇省5、安徽省7、広東省2、雲南省1、青海省1、内蒙古自治区2	47
合 計					2898

☆中国における銅鏡の出土数 2898面
☆日本における銅鏡の出土数 4774面 } 7672面

上記のうち神獣鏡に限定すれば下表のようになる。

神獣鏡出土数			
地域	神獣鏡の酒類	出土数(面)	比率
北中国	画文帯神獣鏡神獣鏡	19	12%
南中国	画文帯神獣鏡神獣鏡	136	88%
全中国		155	100%
日本	三角縁神獣鏡	425	73%
	画文帯神獣鏡	155	27%
	日本の神獣鏡	580	100%
出典 大炎上「三角縁神獣鏡」(安本美典) 古代年代論が解く邪馬台国の謎(安本美典)			



地図1 「北中国」と「南中国」

北中国…黒竜江、吉林、遼寧、山東、河北、河南、山西、陝西、甘肅の諸省、
および、内蒙古自治区、寧夏回族自治区

南中国…江蘇、安徽、浙江、江西、湖北、湖南、福建、広東、四川、雲南、貴州の諸省、
および、広西壮族自治区

王竹峰

第二 真偽判定に関わる具体的問題点

① 銘文の問題

ア 贗造鏡制作のネタ本は、わが国で刊行されている『古鏡総覧(1)』(奈良県立橿原考古学研究所編、学生社2006年刊)と中国で刊行されている『鄂州銅鏡』(鄂州博物館、2002年刊)のたった二冊であるとほぼ見られる。

たとえば、「新発見」の鏡の銘文の三一文字のうちの、三〇文字、九七パーセントまでは、『古鏡総覧(1)』にあるものを、見本にすればよい。

今回、中国の王越意という人の提出した「新発見」の鏡の銘文と、『古鏡総覧(1)』にのっているわが国出土の「三角縁神獣鏡」とは、文字の字体が、全体としてきわめてよく似ている。

「新発見」の鏡の銘文の文字の見本を、『古鏡総覧(1)』ほど、まとめて面倒をみってくれる本は、世

界中のどこにも、ほかに存在していない。

『古鏡総覧（一）』（奈良県立橿原考古学研究所編、学生社、2006 年刊）は今回の「新発見の三角縁神獣鏡」制作の、最有力のネタ本であると断定できる。

イ 銘文対比

① 対比表 王趁意提出鏡の銘文文字と「古鏡総覧」所蔵の鏡の銘文文字との比較

表 王趁意提出鏡の銘文文字と『古鏡総覧(1)』所蔵の銘文文字との比較											
銘文	王趁意氏提出鏡	銘文	出土古墳	銘文	王趁意氏提出鏡	銘文	出土古墳	銘文	王趁意氏提出鏡	銘文	出土古墳
位			奈良県 黒塚古墳 (31号鏡) (130ページ)	母			岡山県 湯迫車塚古墳 (104ページ)	有			奈良県 佐味田宝塚古墳 (204ページ)
至			奈良県 黒塚古墳 (31号鏡) (130ページ)	師			兵庫県 森尾古墳 (76ページ)	聖			京都府 椿井大塚山 (31号鏡) (48ページ)
公			奈良県 黒塚古墳 (31号鏡)	子			京都府 椿井大塚山古墳 (21号鏡) (76ページ)	人			岡山県 湯迫車塚古墳 (90ページ)
卿			〔南中国〕 『鄂州銅鏡』 (20ページ) (54ページ)	辟			京都府 椿井大塚山古墳 (21号鏡) (76ページ)	東			兵庫県 西求女塚古墳 (3号鏡) (78ページ)
子			滋賀県 大岩山古墳 (54ページ)	邪			京都府 椿井大塚山古墳 (21号鏡) (204ページ)	王			奈良県 黒塚古墳 (16号鏡) (56ページ)
孫			滋賀県 大岩山古墳 (178ページ)	口			奈良県 佐味田宝塚古墳 (108ページ)	父			岡山県 湯迫車塚古墳 (104ページ)
壽			奈良県 黒塚古墳 (11号鏡) (南中国) 『鄂州銅鏡』 (38ページ)	銜			奈良県 新山古墳 (204ページ)	西			岡山県 湯迫車塚古墳 (78ページ)
巨				巨			奈良県 佐味田宝塚古墳 (16号鏡)	王			奈良県 黒塚古墳 (16号鏡)
上											岡山県 湯迫車塚古墳 (48ページ)

安本美典氏の作表を鮮明度の関係で一部造り変え（平松）

② 銘文説明

王趁意氏提示の「三角縁神獣鏡」の銘文は「吾作明竟（鏡）真大好 上有聖人東王父西王母 師（獅）子辟邪口銜巨 位至公卿子孫壽」である。

読み下し文は「吾、明鏡を作るに、真に大いに好し。上に聖人東王父・西王母有り。獅子・辟邪、口に鉅を銜む。位は公卿に至り、子孫寿からん」となろう。

③ 特殊文字

王趁意提出鏡の銘文の文字などのうち「卿」の字と銘文のはじまりを示す記号「∴」だけは『古鏡総覧』に例が見られないが、「鄂州銅鏡」にその例が見られる。（参考 丁堂華主編『鄂州銅鏡』〈中国文学出版社、2002年刊〉）

ばお銘文の最初のマークとしては右表のような例が見られる。

銘文のはじまりを示す記号	王趁意氏提出鏡	『古鏡総覧(1)』(ページ) [出土古墳]
中国以上鏡では、銘文のはじまりを示す記号のないものが多い。		〔南中国〕 『鄂州銅鏡』 (38ページ)
		(218ページ) 奈良県 黒塚古墳 (19号鏡)
		(136ページ) 奈良県 佐味田宝塚古墳
		(92ページ) 奈良県 椿井大塚山古墳 (32号鏡)
		(70ページ) 兵庫県 森尾古墳

ウ 三面の銘文からの結論

① 文面比較

王鈇意提出鏡の銘文三十一文字のうち、三十文字は京都府の椿井大塚山古墳の二面の鏡と島根県の神原神社古墳出土の一面（合計三面）の銘文を部分的に組み合わせれば構成できる。全中国出土のいかなる三面をとってもこのようなことはできない。

文様は似ている所があるが、銘文に類似するものがないとき、一面だけ中国で作成されたことは、極めて可能性がすくないといわざるをえない。

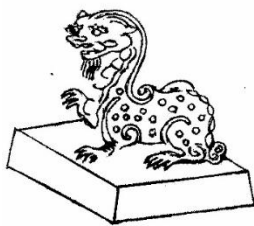
王鈇意氏提出鏡と銘文がほぼ一致する鏡(2面)

京都府椿井大塚山古墳出土鏡(11号鏡) 計二面。
新山古墳出土鏡(33号鏡)、奈良県文章(口)鏡、甚大(好)、上有神守及竜虎(虎)、身有五男二女相保、吉昌。「東王父、西王母」(榜題)。

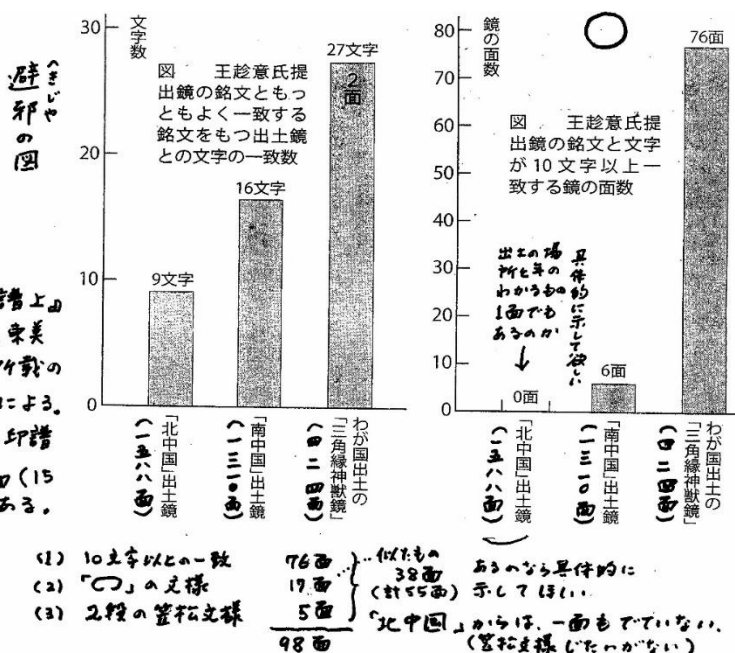
表 王鈇意氏提出鏡の銘文を、構成しうる鏡の銘文 (2面、3面の例)

番号	(A) 銘文 (○でかこんだ文字は、今回の王鈇意氏提出鏡の銘にみえる文字)	(B) 銘文の読み下し文	(C) 銘文(A)の○でかこんだ文字を含む鏡
(1)	「吾(作)明鏡(甚)大(好) ①(有)神守及龍虎 身(有)文章(口)銜(巨) 古(有)聖人東王父西王母 渴飲玉泉飢食糗 如金石」 (椿井大塚山古墳出土 32 号鏡)	吾、明鏡を作るに、甚だ大いに好し。上に仙有り。上に神獸及び竜・虎有り。身に文章有り、口に銜を銜む。古へに聖人東王父・西王母有り。渴しては玉泉を飲み、飢えては糗を食ふ。寿 金石の如からん。	京都府椿井大塚山古墳(32号鏡)、奈良県黒塚古墳(19号鏡)、兵庫県西求大塚古墳(2号鏡、3号鏡、10号鏡)、千葉県城山1号墳。
(2)	「張氏(作)鏡(真)天(巧) 仙(人)王喬赤松子 ②(師)子(辟)邪世少(有) 渴飲玉泉飢食糗 生如金石天相保兮」 (椿井大塚山古墳出土 21 号墳)	張氏鏡を作るに、真に大いに巧みなり。仙人王喬・赤松子。獅子・辟邪、世に有ること少なし。渴しては玉泉を飲み、飢えては糗を食ふ。生きること金石の如くして、天と相ひ保たん。	京都府椿井大塚山古墳(21号鏡)、奈良県黒塚古墳(21号鏡)、兵庫県権現山51号墳、香川県奥3号墳、静岡県連福寺古墳。
(3)	「景初三年 陳是(作)鏡 自有経述 本是京師 杜地(口)出 吏(人)詔之 (位)至三公 母(人)詔之 保子(且)孫 如金石兮」 (神原神社古墳出土鏡)	景初三年。陳氏鏡を作るに、自づから経術有り。本は是れ鏡師にして、杜地に(口)出す。吏人之を買はば、位は三公に至らん。母人之を買はば、子を保ち、孫に(且)しからん。寿 金石の如からん。	島根県神原神社古墳(景初三年鏡)、京都府広瀬15号墳(景初四年鏡)。

— 14 —



王鈇意氏編集『集古印譜上』(中国古印集成、中国・山東美術出版社、2011年刊)所載の古印の鈕(つまみ)の図による。この本は、甘肅編『集古印譜(集古印正、廿九印正)』(1966年成立)の復刻本である。



⑥ 確率論

以上のデータをもとにして、今回の王越意氏提出鏡と「銘文の文字がI〇文字以上一致し」、かつ、「神獣鏡である」とい条件のもとで、今回の鏡が、どの箱（地域）からとりだされたかの確率を、簡単な確率計算法であるベイズの統計学で計算すれば、つぎのようになる。

「日本」からである確率……八十三・五%

「南中国」からである確率……一六・一%

「北中国」からである確率 ……〇%

そして、さらに、「三角縁」であると条件（笠松紋がある）をいれれば、今回の王越意氏提出鏡は、まず、まちがいなく、「北中国」の洛陽などに由来するものではなく、わが国の「三角縁神獣鏡」に由来するものであることになる。

前述の神獣鏡出土数の表（13ページ）をご覧ください。

「三角縁神獣鏡」が、わが国からは確実な出土物として、425面も出土しているのに、中国全土からは、いまだ、一面も「出土」してことが、いかに異状なことか、おわかりいただけるであろうか。

⑦ 王仲殊氏説

昨年無くなった中国の考古学者王仲殊氏は、かつて私に次のようなお手紙を下された。

「安本美典先生

ニンハオ（ニイハオ〔今日は〕の丁重表現）

（二〇一三年の）八月二十一日にお手紙いただきました。

三角縁神獣鏡＝魏鏡説破滅をテーマとする大著を恵贈していただき、ありがとうございます。

二〇世紀の初期に富岡謙蔵が提出した魏鏡説は、これはこれで理解できるものです。

ただし、二〇世紀の八〇年代以降になると、中国本土および朝鮮半島の地域内に、三角縁神獣鏡の出土例が完全に存在しないことが、確認されたのち、魏鏡説は、成立がむずかしくなりました。

とくに、一九八六年十月に、二面の景初四年銘の三角縁盤龍鏡が発見され、いわゆる『特鑄説』もまた、立足の余地を完全に失いました。これは鉄の固い事実です。

何人も、否認することができないことです。

森浩一先生が逝去され、悲しい思いにたえません。なつかしく思うことです。

二〇一三年十一月十日 王仲殊 拝

安本美典先生：

您好！

8月21日專函拜悉。

蒙惠贈標示三角縁神獣鏡魏鏡説破滅的大著，謝忱。

20世紀初期富岡謙蔵提出魏鏡説，這是可以理解的。但是，20世紀80年代以降，在確認中国本地及朝鮮半島境内完全没有三角縁神獣鏡的出土例之後，魏鏡説就難以成立了。特別是1986年10月兩枚景初四年銘三角縁盤龍鏡的発見，使所謂「特鑄説」亦毫無立足之地了。此乃鐵的事實，不容任何人否認。

森浩一先生逝世，不勝傷感、懷念之情。

2013年11月10日

王仲殊 拜

写真 王仲殊先生のお手紙 ↓

⑧ 文様の問題

さらに王越意氏提出鏡の「文様」について考えよう。わが国出土の「三角縁神獣鏡」のばあい、『古鏡総覧』によるとき次のようになる。



西王母
(喜多川歌麿筆)

(A)と(B)の合計
55面
(424面中)

わが国出土の「三角縁神獸鏡」の「ㄱ」の文様(四二四面調査)

(A) 「ㄱ」とほぼ同じ形をもつもの………	17面
(このうち、椿井大塚山古墳出土鏡………)	5面
黒塚古墳出土鏡………	7面
(B) 「ㄱ」と似た形をもつもの………	38面
(このうち、椿井大塚山古墳出土鏡………)	12面
黒塚古墳出土鏡………	10面
55面	



椿井大塚山古墳出土鏡と、黒塚古墳出土鏡とに、とくに類似の文様が集中してあらわれる。これは、「銘文」の「あ」と、同じ現象である。



京都府相楽郡山城町
椿井大塚山古墳
(31号鏡)
『古鏡総覧(I)』
94ページ



京都府相楽郡山城町
椿井大塚山古墳
(20号鏡)
『古鏡総覧(I)』
96ページ



奈良県天理市黒塚古墳
『古鏡総覧(I)』
124ページ

(A) 王超意氏提出鏡の「ㄱ」とほぼ同じ文様をもつ鏡の例(四二四面の「三角縁神獸鏡」のうち)

文様では、日本出土の「三角縁神獸鏡」では、笠松が1重(1段)のもの、存在せず、2重(2段)のものは、岡山県の湯迫東塚古墳(2面)、神奈川県の大塚山古墳、京都府の椿井大塚山古墳、兵庫県の大塚山古墳出土の、5面の同型鏡に、みられるのではなか、(4世紀後半以後)



奈良県天理市
黒塚古墳
(7号鏡)
『古鏡総覧(Ⅰ)』
110ページ



京都府相模郡山城町
所
橋井大塚山古墳
(32号鏡)
『古鏡総覧(Ⅰ)』
92ページ



京都府相模郡山城町
橋井大塚山古墳
(4号鏡)
『古鏡総覧(Ⅰ)』
112ページ

(Ⅱ) 王超意氏提出鏡の「」と似た形の文様をもつ鏡の例(四二四四の「三角縁神獸鏡」のうち)



(Ⅲ) 「」
湖北省鄂州市鄂銅
西山鉄礦出土鏡
「画文帯神獸鏡」
『鄂州銅鏡』(中国・
中国文学出版社、
2002年刊)
46ページ



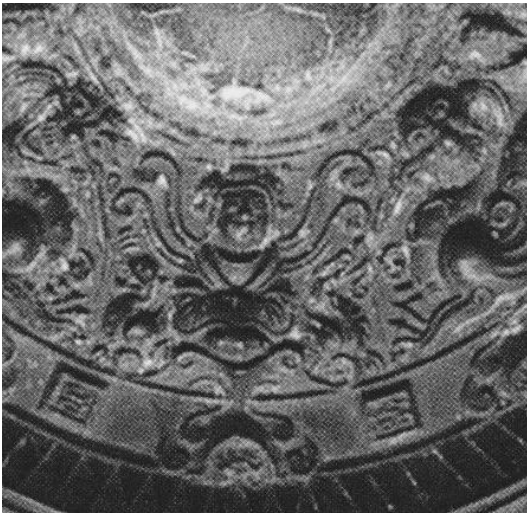
(Ⅳ) 「」
浙江省紹興県漓渚
出土鏡
「画文帯神獸鏡」
『浙江出土銅鏡』
(中国・文物出版社、
2006年刊)
カラー図版38



(Ⅰ) 
湖北省鄂州市鄂銅
54号工地出土鏡
「画文帯神獸鏡」
『鄂州銅鏡』(中国・
中国文学出版社、
2002年刊)
52ページ

「南中国」出土鏡の「」開連文様
(しらべた一三〇面中、四面のみに見出せる)
全中国二八九面中

南中国のみ



上図（V）をグ
レー写真で写した
もの

IV湖北省鄂州寒溪公路第1号 三国
早期吳墓出土鏡「画文帯神獸鏡」『鄂
州銅鏡』94ページ

「北中国」出土鏡には台座の関連文様が一五八八件中皆無

「北中国」出土鏡ではもともと神獸鏡自体がほとんど出土していない。そのため神像の前ののりのような文様は全く見出すことが出来ない。

イ 文様の問題の説明

④ 「北中国」と「南中国」とでは、鏡の文様の傾向や、銅原料などの特徴が異なる。「南中国」でも、すくなくとも、一三〇〇面以上の鏡が、考古学的発掘によって出土している。そのなかには、今回の鏡に近や文様と、銘文をもった鏡が、いくつか出土している。

王趁意が、なぜ、洛陽付近にばかりこだわり、「南中国」出土の鏡に着目しないのか、不審である。

思うに日本の「三角縁神獸鏡」は、洛陽に都した魏から与えられたものであるはずという、強い思い込みがあるのであろう。二〇一〇年発表の論文で王趁意氏はのべている。「漢魏の時期の洛陽地区が日本の三角縁神獸鏡の源の地である」と。

きわが国出土の「三角縁神獸鏡」は、「南中国」の長江（揚子江）流域地方の鏡の「文様」と「銘文」との影響を受けて成立したとみられる。

ただ、わが国出土の「三角縁神獸鏡」は、文様でも、銘文でも、中国出土鏡にみられない独自の発展をとげている。文様においては、「傘松文」といわれるものが、はっきりとした形ではいるようになる、「銘文」「文様」において、あとで紹介するような独自性がある。

⑤ 今回「親発見」の鏡は、中国全土の、二八〇〇面をこえる発掘によって出土したいずれの鏡よりも、日本出土の「三角縁神獸鏡」に近い。日本出土の「三角縁神獸鏡」のきわめて多くが、今回「新発見」の鏡と、共通の「銘文」「文様」をもつ。その共通性は、量においても、質においても、中国全土出土の鏡を、はるかに上まわる。つまり、時空をこえて、不自然に、「三角縁神獸鏡」に「似すぎて」いるのである。

ウ 笠松紋について

王仲殊説に『日本の三角縁神獸鏡上、普遍的に存在している笠松文様は、中国の一定の画像鏡のうえに見られる「旌（せい＝ヤクの尾を飾りにした旗）」が変化してきたものであるという説があるが、これは独特の様式であり、いかなる中国鏡にも見られないもの』であるとする。（王仲殊著 「日本三角縁神獸鏡綜論」『考古』1984年（5））

わが国出土の笠松文様は3段以上が普通で二段の笠松紋はかなり珍しい。これらの同型以外には見当たらない。祖のことに気がつく王趁意氏は、確かに好く研究している。しかし、話は逆で、王趁意氏の研究の成果が「新作鏡」に反映されている可能性がある。王趁意氏提示鏡は二段の笠松である。

③ 同範鏡の問題

ア 王趁意氏論文「中原文物」二〇一四年第六期ではもちろん日本の三角縁神獣鏡との同範性は主張していないが、参照すべき類似のあるいは三角縁神獣鏡は次のものがある。

① (日本) 榎原考古学研究所附属博物館等『大古墳展』東京新聞大塚巧芸社二〇〇〇年刊、文中引用 椿井大塚山古墳出土M3 4号鏡。天王日月獣文帯四神四獣鏡 23.3

② (日本) 榎原考古学研究所附属博物館等『大古墳展』東京新聞大塚巧芸社二〇〇〇年刊、文中引用 黒塚古墳出土1 9号鏡 吾作四神四獣鏡 22.3

③ 樋口隆康著 『三角縁神獣鏡新鑑』日本学生社2 0 0 0年刊、文中引用図版十八鏡式3 2 椿井大塚山古墳出土M3 4号鏡。 車塚古墳鏡式3 2 銘帯四神二獣鏡 22.0

イ 鏡式3 2

樋口氏の言う鏡式3 2は銘帯式三角縁四神二獣鏡で(事典同範番号9—p 4 1 8) 銘文Ⅱ-2-4 p 5 2 4に「陳是作竟甚大好上有王父母左有倉龍右白帟亘遠道相保」とある。

平塚真土大塚山古墳出土 陳是作四神二獣鏡 22.1 (古鏡総覧6 2 ページ)

椿井大塚山古墳出土 M2 3 鏡 陳是作四神二獣鏡 22.0 (椿井尾塚山古墳)

湯迫車塚古墳出土 e-2 鏡 陳是作四神二獣鏡 22.0

々 e 鏡 陳是作四神二獣鏡 22.0

兵庫権現山5 1 号墳出土4 号鏡 陳是作四神二獣鏡 21.9 (新鑑図版2 0)

これらは現代の工場で作ったと全く劣らないほどよく似ている。(写真省略)

ウ 参考

日本武尊がのちに東夷を討ちにいくときには、吉備武彦と大伴武口連之が随従を命ぜられた。この吉備武彦は、碓日坂で日本武尊とわかれて越国にまわったり、美濃でふたたび合流したのち、伊勢から天皇のもとへ復命に帰ったり、物語の上ではなかなか活躍したことになる。

これらを、そのまま歴史的事実としてうけとろうというのではないが、九州の征伐には濃尾の勢力を起用し、東国の征伐には吉備の首長を重用したという伝えは、北九州にまで達している同範鏡は濃尾以西に分布し、関東にまで達している同範鏡は吉備にも分布するものが多いという事実を思いださせるに十分であろう。

これはたんなる偶然の一致であるかもしれぬが、同範鏡の分配を考えるばあいには、ただ地方にあって分配をうけたもののほかに、積極的に分配に参加協力したものの存在をみとめる参考にはなろう。

こういう話のつづきにもちだすと、あたかもこの湯迫車塚古墳が吉備武彦の古墳であると推定しているようにうけとられるかもしれぬが、車塚古墳唐発見された1 3 枚の鏡のなかには、三角縁神獣鏡の同範鏡が八種九枚もあり、そのうちの四種の同範鏡は、関東地方に分散して発見されているものであるという事実がある。すくなくとも、岡山市湯迫の首長が同範鏡をまとめて入手した事情は、関東の個々の首長のばあいとは、ちがったものであったことが考えられる。また、こういう事実がある以上、吉備の豪族が東国の経営に参画したという伝承をもっていることも、もっともなことだと思われる。

安本は景行天皇を四世紀末と考える。卑弥呼より後である。

④ 出土状況

ア 中国の出土品 (文献)

「北中国」では、すでに『洛陽出土銅鏡』(中国・文物出版社刊、一九八八年刊)、『洛陽考古集成』[上、下](中国・北京図書館出版社、二〇〇七年刊)、『洛陽焼溝漢墓』(中国・科学出版社、一九五九年刊)、『南陽出土銅鏡』(中国・文物出版社、二〇一〇年刊)、『長安漢鏡』(中国・陝西人民出版社、二〇〇

二年刊)、『千秋金鑑』(中国陝西出版集團三秦出版社、二〇一二年刊)『歷代銅鏡文飾』(河北省出土の銅鏡についてまとめたもの。中国・河北・美術出版社、一九九六年刊)、『吉林出土銅鏡』(中国・中国文物出版社、一九九〇年刊)など、ほぼ確実な考古学的発掘による出土鏡についての報告書類が刊行されている。

これらの報告書に載せられている「北中国」での出土鏡は、一五〇〇面を確実にこえる。これら一五〇〇面以上の鏡のなかに、今回の新発見の鏡のような「文様(神獣鏡)」と、「銘文(わが国出土の三角縁神獣鏡の銘文と高い共通性がある)」をもつものは、**一面も存在していない**。

このことは、もともと、古代の「北中国」の地には、王愼意氏呈示のような鏡が、存在していなかったことを、強くさし示す。もし、あるていど存在したのなら、出土しないはずがない。

発掘によっては、まったく出土しない種類の鏡が、洛陽の骨董市にだけ、時空をこえて、忽然と姿をあらわす。これは、一種の手品の類とみられる。

このような古代の銅鏡が、この地域で、出土によって、「新発見」された可能性は、まずないといってよい。もともと、**存在しなかった種類のものであるから、盗掘によって出土する可能性もまずない**。

イ 入手経路

今回「新発見」の鏡は、洛陽の骨董市で譲り受けたもので、正確な出土地点は、わからないという。中国の骨董市で出る鏡の過半は、贋造品とみられる。

中国全体では、二八〇〇面以上の鏡が、ほぼ確実な考古学的発掘によって出土している。出土地不明の鏡によって、議論しなければならない理由が、よく分らない。

ウ 「親発見」という矛盾

今回「新発見」の鏡をもちだした王愼意氏は、すでに二〇一〇年に発表した論文で、つぎのようにのべている

「事実上、ここ数年のあいだに、洛陽を中心とする調査研究により、すでに陸続として、後漢晩期から、三国・西晋早期にいたる三角縁神獣鏡、三角縁竜虎仏飾鏡、三角縁笠松紋(安本註。笠松紋は、傘松文とも書かれ、書き方が、人によって異なる)神獣鏡、そして、この面に帯で境をした欄をもつ三角縁神獣鏡など、十余面(王愼意氏のこれら十余面をすべて認めるのか)の銅鏡が、出現している。」(『中原文物』二〇一〇年四期【総 154 期】。なお、「中原」は、洛陽地区の意味。)

二〇一〇年の段階で、「陸続として」「出現している」のなら今回発見された鏡は「新発見」でもなんでもないことになる。(すでに二〇〇七年一月二十四日朝刊の『朝日新聞』にも今回と同じような記事が載っている)。

二〇一〇年の時点で王愼意氏が示す「十余面の銅鏡」も、すべて、考古学的な発掘による出土品ではない。一級資料にもとづくものではない。

出自の不明確なものをもとにして、「陸続として」などと記す王愼意氏は、中国でも、わが国でも、古代史研究家によくみられる強い「思いこみ」をもつタイプの人のようにみえる。そこでは、公平な判断が、行なわれているのか。

エ 今回「新発見」の鏡は、二〇〇九年ごろ(以前)に、入手したという。それならなぜ、王愼意氏は、二〇一一年に刊行したみづからの著書『中原蔵鏡聚英』(中国・中州古籍出版社刊)のなかで、この鏡のことを、紹介しないのか。話が不自然である。今回「新発見」の鏡は、『中原蔵鏡聚英』などに対する批判をうけて、欠点を改善し、より日本出土の「三角縁神獣鏡」に近づけているようにみえるふしがある。

オ 中国では、八千円以下の費用で、専門家がみても、まったく本物と区別のつかない贋作品をつくるのが可能である。

⑤ 偽造品をめぐる環境

ア 経済的環境

経済的合理性を考えてみよう。盗掘によって、このような鏡を探し出すことや、どこからか、伝世品を探し出すことを考え、そのために人件費をそそぐよりも、現代の中国人が、贋造品をつくるほうが、はるかに驚単で、かつ、安あがりである。(競売は一兆円産業)

イ 考古学会の雰囲気

ほぼ確実な考古学的発掘による出土鏡は、中国のものと、日本のものとを合わせれば、確実に七〇〇〇面を上まわる。八〇〇〇面にせまるといってよい。

なぜ、このような膨大な資料を、ビッグデータとしてあつかい、統計的に整理して、合理的な推論を行わないのか。

そして、その結果を重要と考え、それを中心に報道しないのか。出土地もさだかでない、贋造であることが疑われる一面の鏡などで、毎回、上へ下への大さわぎをくりかえす。

議論の方向を、間違えているのではないか。

ウ 三角縁神獣鏡作り方講演会 (2015 年 11 月 04 日)

三角縁神獣鏡を巡る最新の研究成果が披露された公開講演会

(橿原市の県社会福祉総合センターで)

橿考研成果 500人聴き入る

邪馬台国の女王・卑弥呼が中国・魏から下賜された鏡との説もある三角縁神獣鏡をテーマにした県立橿原考古学研究所の公開講演会が3日、橿原市の県社会福祉総合センターで開かれた。同鏡を巡る最新の研究成果に約500人が聴き入った。

水野敏典・総括研究員が、約270面の同鏡を3次元(3D)計測した成果を紹介。鏡に残る鋳型の傷などを分析した結果、中国製とされる「舶載鏡」と、それを模して日日本で作った仿製鏡には製法技術に共通性があるとし、「すべてが中国製か日本製となる可能性がある」と主張した。

また清水康二・主任研究員は、鋳型の傷を詳細に検討。舶載鏡と仿製鏡の間でも、傷の位置や形状が数カ所で一致し、同じ鋳型を再利用してたと考えられる例があると指摘し、「舶載鏡から仿製鏡まで同じような工人が作っていた可能性が高い」とした。

最後に菅谷文則所長が講演し、中国では出土しておらず、日本で約560面見つかっている同鏡を**国産とみる考え**を披露した。(2015年11月04日 Copyright c The Yomiuri Shimbun)

エ 大学者でも陥る錯誤

きわめて多くの青銅器を、実見し、精密な測定記録などを残した、大正・昭和時代の大考古学者、梅原末治(京大教授)が、その著『漢三国六朝紀年鏡図説』(桑名文星堂。一九四三年刊)のなかの、「支那紀年鏡の贋作品について」という文章のなかでのべている(原文は、旧漢字、旧仮名遣い)。

「近年に至って多数の贋作の関係品を生じ、それらが年とともに巧妙の度を加えて、研究者を誤らせている実状にあるのは学術的見地からまことに寒心すべき事実と言わねばならぬ。」

「欠陥を克服せんとしていることは筆者の属目する実例が年とともに変化を示して、そのあるものの如きは相当の注意をもって臨んでいるはずの筆者自らが、その誤りを犯す程度にまで達している。」つまり、贋造品については、そのおかしい点、欠点を指摘すればするほど贋作者はその指摘をふまえ、工夫をし、さらに本ものに近いものを、贋造するという構図になっている。

今から七〇年以上前にすでにこのような状況になっているのである。

この梅原末治でさえ、偽造物を本物であるとし、批判をうけるという騒動を引き起こしているのである。

長大な歴史を有する中国では古物も多い。それが尊重されるため、偽造物を作る技術もたえず進歩しているのである。

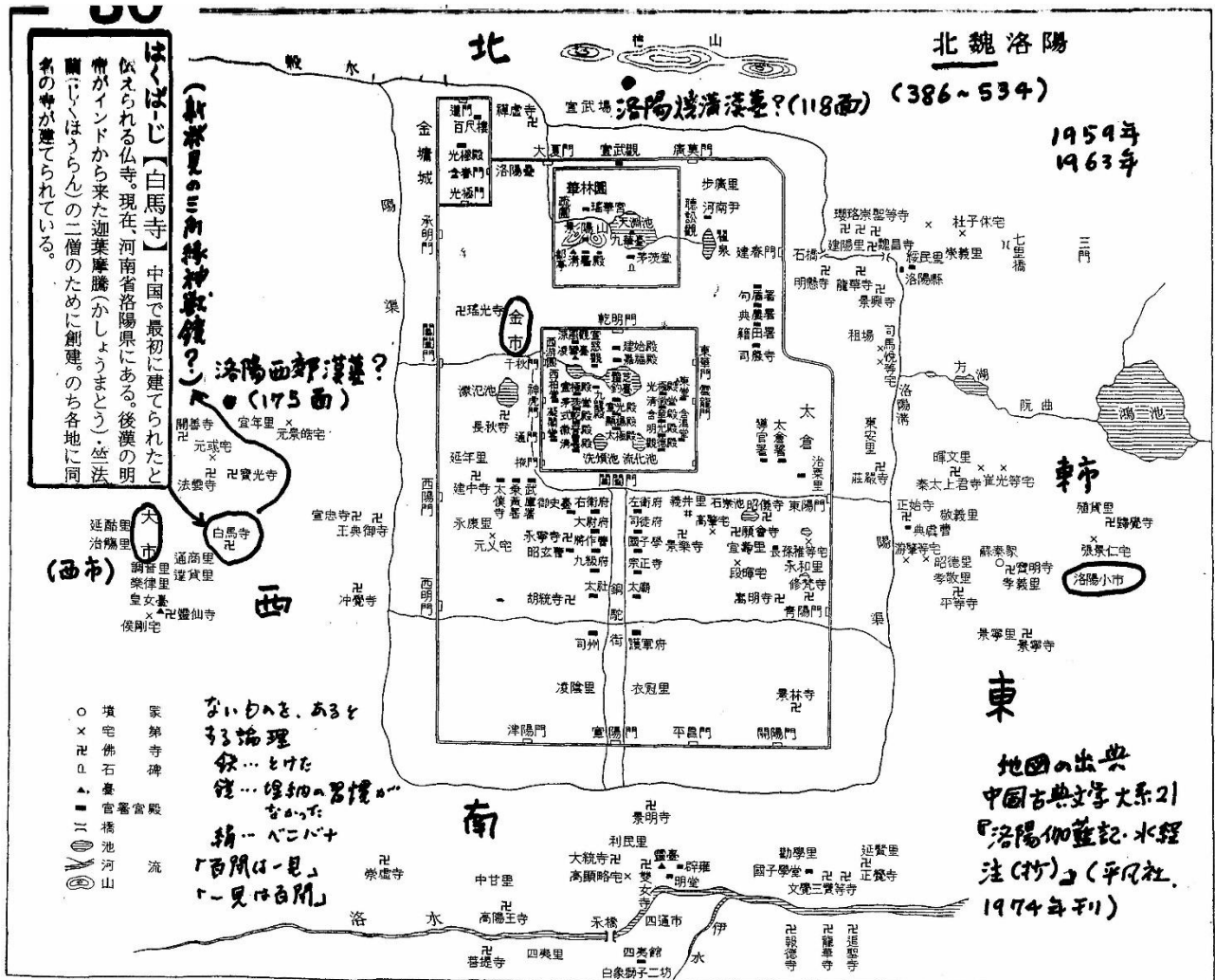
⑥ 王尙意氏を疑え

ア 王尙意氏の人となり

第一発見者、そして強く主張する人は、しばしば捏造に關与している。

中国では、コレクターはしばしば捏造、模造と關係する。そもそも捏造の意識に乏しくかつ金銭的利益と結びつく。

王尙意氏は河南省周口市扶溝県の国土資源局局長で共産黨組書記という社会的權威を持ち、無理の通りやすい立場にあるとみられる。



中国では骨董品はしばしば賄賂の方法として用いられてきた。高官などに安物の骨董品を贈る。別にその骨董品を高価で引き取る組織が存在するのである。王尙意氏はコレクターとして骨董品の世界にタッチしてきた人のようにみえる。

イ 研究の方法

私 (安本) は日本出土の「三角縁神獸鏡」のほぼ全てを分析し今回の「王尙意氏提出鏡」が「椿井大塚山出土鏡」及び「黒塚古墳出土鏡」「湯迫車塚古墳出土鏡」と特に強い關係を持つことを知った。

ところが王尙意氏は分析もせずに椿井大塚山古墳、黒塚古墳、湯迫車塚古墳に着目している。ほんとうにそんなことが出来るのか。あやしい。むしろ王尙意氏は今回提出の銘文、文様 C 倒置形、二段の笠松文様などが三古墳出土鏡のものと共通のものを部分的に用い組み合わせたものであることを事前に知っていたのではないか。椿井大塚山古墳、黒塚古墳はいずれも発掘当時大きく報道され史料の入手も容易である。

わが国出土の「三角縁神獣鏡」の銅原料が鉛同位体比から見て魏系（北中国）のものではなく呉系（南中国、長江流域系）のものであることをどう説明するのか。わが国の三角縁神獣鏡が3世紀からでなくおもに**4世紀以降の遺跡**から出ていることに留意するべきである。

ウ 考古学に対する批判

旧石器捏造事件がおきたとき、人類学者で、国立科学博物館人類研究部長（東京大学大学院理学系生物科学専攻教授併任）の馬場悠男氏がのべている。

「私たち理系のサイエンスをやっている者は、確率統計学などに基づいて『蓋然性が高い』というふうな判断をするわけです。偉い先生がこう言ったから『ああ、そうでございますか』ということではないのです。ある事実が、いろいろな証拠に基づいて100%ありそうか、50%か、60%かという判断かを必ずします。どうも考古学の方はそういう判断に慣れていらっしゃらないので、たとえば一人の人が心同じことを何回かやっても、それでいいのだろーと思ってしまいます。今回も、最初に変だと思ったけれども何度も同じような石器が出てくるので信用してしまったというようなことがありました。これは私たち理系のサイエンスをやっている者からすると、まったく言語道断だということになります。」

「経験から見ると、国内外を問わず、何れ所もの自然堆積層から、同じ調査隊が、連続して前・中期旧石器を発掘することは、確率的にほとんどあり得ない（何兆分の一か？）ことは常識である。

だからこそ、私は、東北旧石器文化研究所の発掘に関しては、石器自体に対する疑問や出土状況に対する疑問を別にして、この点だけでも捏造と判断できると確信していたので、以前から、関係者の一部には忠告し、拙著『ホモサピエンスはどこから来たか』にも『物証』に重大な疑義があると指摘し、前・中期旧石器発見に関するコメントを求められるたびに、マスコミの多くにもその旨の意見を言ってきた。

しかし、残念ながら、誰もまともに採り上げようとしなかった。とくに、マスコミ関係者の、商売の邪魔をしてもらっては困るという態度には重大な責任がある。」（以上、「検証・日本の前期旧石器」春成秀爾編・学生社二〇〇一年刊）。

（西川氏に直接不満を述べているのではない。従来の考古学に、すでにいろいろな方が不満をのべている。それを具体的に検証しようと思う。）

炭素14年代法の歴博発表について、象徴的なのは、司会の北條芳隆東海大教授（日本考古学協会理事）が、マスコミに異例の呼びかけを行ったことだ。

「会場の雰囲気でお察しいただきたいが、（歴博の発表が）日本考古学協会で共通認識になっているわけではありません。日本考古学協会は、（旧石器）捏造事件を経験していることを充分ご理解いただきたい」

『読売新聞』の記者であったジャーナリストの矢沢高太郎氏はのべている。「新聞やテレビで大きく報道されることによって社会的な関心が高まり、遺跡の生命が守られたケースは多い。しかし、同時に弊害もまたさまざまな形で発生した。学者にとっては、地味な論文を発表する以前にマスコミで大々的に取り上げられるほうが知名度も高まり、学界内部での地位も保証される傾向が強まった。一部の学者や行政の発掘担当者はそれに気づき、狡知にたけた**マスコミ誘導を行ってくる**ケースが多々見られるようになってきた。その傾向は、藤村氏以外には、“考古学の本場”である奈良県を中心とする関西地方に極端に多い。そして、発表という形をとられると、新聞各社の内部にも何をおいても書かざるをえないような自縄自縛の状況が、いつの間にか出来上がってしまった。そんなマスコミの泣き所を突く誇大、過大な発表は、関西一帯では日常化してしまっている。藤村氏は『事実の捏造』だったが、私はそれらを『解釈の捏造』と呼びたい。」（「旧石器発掘捏造“共犯者”の責任を問う」（『中央公論』二〇〇二年十二月号）

以上

